

## ◇ 談話会要旨 ◇

### ブラジル —— 8年の駐在生活を終えて ——

内 田 弘 子

1971年から79年迄、サンパウロで駐在生活を過した。その間に見聞きしたことを紹介させていた  
だいた。

#### I ブラジルのイメージをまとめると

日本とほぼ同じか、やや多い程度の人間の数。面積23倍。国土は、南北緯度にして、37～38℃。暑い  
だけでなく、熱帯雨林から霜も雪もある温帯迄。乾燥地域はあるが、砂漠はない。住民は、真白から  
真黒まで、混血さまざま。複雑な人種のるつぽ。<sup>オルデン</sup>“Ordem e Progreso”<sup>プログレス</sup>（秩序と躍進）のスロー  
ガンを国旗にうたい込み、21州をもつ連邦共和制。与党と野党一つずつの軍事政権。倒産寸前の国家  
財政。独立して150年の若い国。首都は、人工都市ブラジリア。東京から、JALの直航便で約29時  
間。

#### II 開発と地域性

1500年に、ポルトガル人によって、西欧に知られるようになったこの国は、植民・開発に、地域  
的なサイクルをもったようである。雑な言い方をすれば、北から南へ、そして、現在は、北東部は後  
進地域になり、商部のサンパウロ・ミナス・ゼライス・リオ・グランデ・ド・スール州などが経済の  
中心になっている。

##### ① 発見時代（北東部） —パウ・ブラジル—

紅い染料の得られる“パウ・ブラジル”の木は、その木のある国“ブラジル”の名になった。海岸  
から内陸部へ、ポルトガル人の男手によって。オランダ、フランスが一部占領する短い期間もあった。  
すでにインディオとの混血がはじまる。

##### ② 植民地時代（北東バイア州） —砂糖きび—

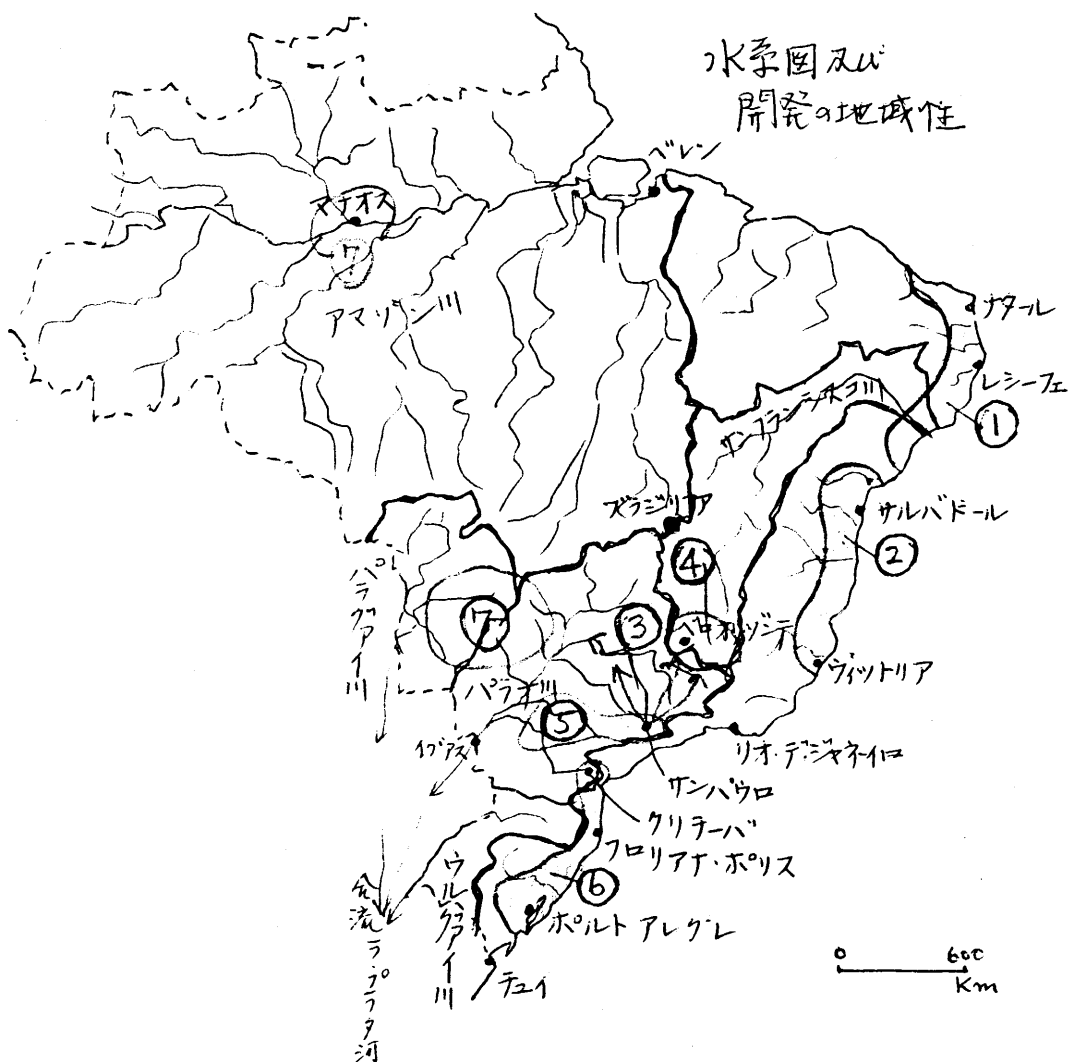
17Cに入って、砂糖きびの栽培に伴い、奴隷が導入。黒人人口は、現在のブラジル人の大きな要素  
になって来る。サルバドールを中心とする植民地時代。

##### ③ 探検隊時代（サンパウロから奥地へ） <sup>バンディランテス</sup>

16C後半から18C迄、サンパウロを起点に川を下って、（海岸山脈のため内側に向って川が流れる、  
地図参照）インディオ狩りと金鉱探検が行われた。数百人に家畜を伴い、町を作り、耕作しながら、  
十年ぐらいの単位で出掛け、一部はそのまま定住した。ミナスゼライス州迄の開拓時代。

##### ④ 独立前夜（ミナス・ゼライス） —金 鉱—

探検隊の発見した金鉱によって、ミナスとリオ・デ・ジャネイロが結びついて発展。金山をめぐる  
闘争暗躍が絶えず、対ポルトガル本国への憎しみとなって、独立への気運を作った。この間、南部は、  
金運搬用ロバの産地にすぎなかった。



⑤ 独立へ（サンパウロ）ーカフェー

北部から移って来たコーヒーは、18C後半から、サンパウロ州で盛んになり、19C初め、すでに輸出商品となり、1850年には全世界の50%の生産額をほこる全盛時代に入る。コーヒーの豪農の出現と、イタリー移民の導入が、州の内陸のテラ・ローンア地帯のコーヒー大農園を、更に富ませることになり、サンパウロ市の基礎となる。1822年ポルトガルから独立。

⑥ 独立以後 南部三州 ードイツ移民ー

手工業をもつドイツ移民、ぶどう栽培のイタリー移民の入植が南部に始まり、気候風土が、彼等の故郷に近く、着実な方法で、今日の基礎を築く。大統領・政治家・軍人を輩出。

⑦ 現在のフロンティア（マツ・グロッソとアマゾニア）

## Ⅱ ブラジル人のものの見方

多種多様な人種民族の複合国家だから、一口に規定は出来ない。しかし、移民の寄合いという点で、夫々の民族の個性が強張されて表面化するものと、同化されるものがある。表向き人種差別のない社会環境、寄合いでありながら、夫々の民族のもつ文化を尊重しつつ、大地の育む、ブラジル文化の創造への道は開けている。

第二次大戦末期、イタリー移民は、母国が降伏した日、戦いが終わったとお祝した。ドイツ人は、戸を閉めて、家に引きこもった。日本移民は、泣きながら働いた。ブラジル人の好きな小ばなしの一つである。イソップ童話のキリギリスは、冬になって、蟻に“夏の間、貴方々の奏でる音楽で、よく働く事が出来た、さあさあ、どうぞ、お入りなさい。”と訳されている。そのくせ、間違っても“Sorry”を絶対に言わない人達。

家族（親族）、仲間（鍋という言葉で表現）、教会の関係、という人間関係を大切に。共同体とでも言ったらいいと思う。個人が優先するので、愛社精神などは、彼等にとっては理解の外だ。会社を出れば、社長も友人になる。アミーゴというのは、心許せる友人のことである。

ラテンのもつ天性の明るさ、卒直、寛大、親切の反面、プライドの高さ、堂々としたあつかましさ、しぶとさ。大陸の人間ではある。

ポルトガル語を統一の一つのきずなにして、大陸の西側のスペイン語圏と区別し、ナショナリズム、愛国精神の高揚を計る。繰返された革命、悪性のインフレにもかかわらず強気な経済政策。民度・国民所得の差は、はげしく、それで居て、21世紀に夢をもつ若い国を、地球の反対側（裏側という言葉は彼らを刺戟する）に帰って考える時、日本の文化・社会との差に、やはり、はるかなる国の感を深する昨今である。

（1980. 1. 26 6回生）

## 40日間南北アメリカ縦断の旅

田 中 晶 子

目的一未知への好奇心を満足させる事の他に、冒険が味わえる事、一人になる事。一人旅は目的であると同時に冒険の手段でもある。何しろ英語も不十分だけど38/43日はスペイン語圏の旅行なのに全くできず、自他共に許す方向音痴ときている。

コースー可能な限り極に近い所から赤道を越え、逆迄辿る。高地と低地を経験する。宿泊地を北から順に書くと、フェアバンクス、アンカレッジ、バルディーズ（パイプライン終点であると共にコロンビア大氷河の海に流れ込む湾奥）、ラスベガス（グランドキャニオン）、メキシコシティ、メリダ、コスメル島（カリブ海）、パナマ、キト、グアヤキル、リマ、バラカス（ナスカ地上絵の近く）、クスコ、フリアカ（チチカカ湖）、ラパス、サンチアゴ、プンタマレナス（マジェラン海峡）。以上である。

日程ー7/22～9/3 1980 マヤ・アズティカ、プレインカ・インカの遺跡巡りは能率を考え、ア